研究主題
「特別支援学級の話合い活動における場の設定
～生活単元学習での教師のファシリテーションを通して～」

八王子市立七国小学校
主任教諭　布野　玲子

第１　主題設定の理由

令和の日本型学校教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、教師には従来の知識伝達型の教授法から子どもが主体的に学び、行動を起こせるように伴走者として促進するファシリテーション能力が求められるようになっている。知的障害特別支援学級では、児童の障害の特性や多様性、発達段階の差により、子ども同士の「対話的な学び」に困難さがある。そこで、ファシリテーションについて学び、ファシリテーションの技法を用いることで、知的障害特別支援学級でも「主体的・対話的で深い学び」を実現することができるのではないかと考えた。特に、話合い活動における場の設定を工夫することで、「主体的・対話的で深い学び」につなげられるのではないかと考え、本主題を設定した。

第２　研究仮説

知的障害特別支援学級でも、ファシリテーションの技法を用いて話合い活動における場の設定を工夫することで、議論が成立するのではないか。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

（１）先行研究の分析

ファシリテーションに関する先行研究では、工藤（2021）「教師のファシリテーション能力についての一考察」で、斉藤雄次（2021）「学校教育におけるファシリテーションの可能性」で、学校教育におけるファシリテーションの実際と必要性について述べている。ファシリテーションとは、「人々が集い、何かを学んだり、対話したり、創造しようとするとき、その過程を、参加者主体で、円滑かつ効果的に促していく技法」（中野，2019）のことである。その具体的な技法について書かれている文献を参考にし、授業に取り入れられる内容を検討した。

（２）研究内容

１　ファシリテーションの８つのスキル（本山、2022）

①　計画のスキル

１）目的の明確化（話し合う目的を具体的に示す。）

２）円滑なコミュニケーションの基礎的な準備

・グランドルール（話合いの場におけるルール）を決めておく。例）否定的な態度をとらない。意見が変わってもよい等

・必要な用具・機材の準備（ホワイトボード・ホワイトボードマーカーなど）
・机と椅子の配置方法（心理的な距離感への配慮）
〇スクール形式（教室型、学校型）　〇ロの字、コの字形式（会議型）
〇討議形式（シマ／アイランド型）　〇テーブル・レス方式（オープン・ステージ型）
３）話合いを進めるための作戦
・目的・ゴールに照らして、何をどこまでやるか、どんな方法でやるか、時間配分はどうするか検討する。（例：問い⇒発散⇒収束⇒振り返り）
・話合いの予定表の作成（流れや時間配分の目安など）

② 場づくりのスキル
共感的コミュニケーションの基盤づくり（みんなが安心して意見を出し合える場の雰囲気づくり）
例）アイスブレイキング、ウォーミング・アップ、グランドルールの共有、簡潔な導入、理解の確認等

③ 傾聴と質問のスキル
１）お互いの発言を積極的によく「聴く」態度をもてるよう、率先して傾聴する。マイナスの非言語的メッセージを出さない。
２）オープン・クエスチョン（拡大型質問）とクローズド・クエスチョン（限定型質問）の使い分けをする。

④ 記録のスキル
議論の見える化
・ファシリテーション・グラフィック（議論の内容をホワイトボードや模造紙などに文字や図形を使って分かりやすく書き留め、「議論を描く」こと）を用いる。⇒キーワードを見付ける。

⑤ 観察のスキル
１）場の空気を読む。（議論のプロセスと参加やの気持ちをチェックして次の進行につなげる。）
２）発言がプロセスに沿っているかを確認する。
３）発信者のかたよりがないか。
４）脱線を軌道修正する。
５）チェンジ・オブ・ペース（休憩を入れる）

⑥ コンフリクト（意見の対立や葛藤、衝突）への介入のスキル
１）コンフリクトを前向きに捉える。
２）コンテクスト（文脈）の共感的理解の促進
対立の背景や文脈をしっかりつかみ、それを双方が共感的に理解できるようにする。

３）視点を変えて、参加者が別の知恵を出すように支援する。（合力の視点をもって、対立を展換する。）

４）　感情的対立への介入

休憩をとる。１回クリアする。感情に共感しながら傾聴する。対立の図式を認識させる。

⑦　合意のスキル

コンセンサス（これなら納得して受け入れられる）を使った意思決定。８０％の合意を目指す。

⑧　フォローアップのスキル

話し合いの決定事項を文書等で残す。

決定事項のチェックと進行状況の確認

２　ファシリテータ（話し合いの進行役）としての基本的視点

①　話し合いのコンテントとプロセスを区別する。

コンテント（コンテンツ）	プロセス
グループの持つ課題やテーマ、議論の中身、作業などの内容的な側面	グループの中で起こっている、人と人との関係や議論の進み方などの関係性や過程の側面

⇒プロセスに着目し、より良いグループのプロセスを支援し、促進していく。

②　話し合いの時系列的構造を理解する。

計画（Plan）⇒実行（Do）⇒振り返り（Check）⇒対策（Action）の PDCA サイクルを意識する。

以上のファシリテーションの８つのスキルとファシリテータの視点を取り入れながら、児童の特性を考慮し、特別支援教育の観点から以下の工夫を行った。

〇特別支援学級の児童が主体的に活動できるための工夫（ファシリテーションの技法を用いる。）

・グランドルール（話合いの場におけるルール）を決めておく。

自分の意見を一方的に言い、他者の意見を受け入れることが困難な児童がいること、自分の意見を表出するのが困難な児童がいることから、次の２点に絞ってグランドルールを設定する。

①否定的な態度をとらない。②話さなくてもよく聴いていればよい。

・話し合いの段取りをする。

①テーマを示す。②ゴールを提示する。③手順を示す。④着眼点を示す。

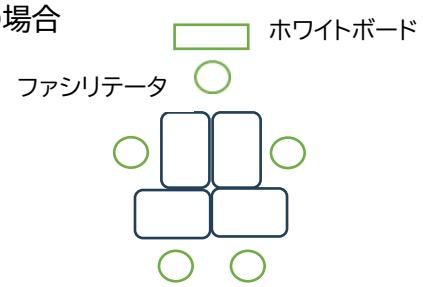
・ファシリテーション・グラフィック（議論の内容をホワイトボードに文字や図形を使って分かりやすく書きとめ、「議論を描く」こと）を用いる。障害特性による合意形成の難しさに対する支援として、ファシリテーション・グラフィックを用いることで、議論の焦点を明確化

し、合意形成できる論点を見えやすくする。

・場の工夫（話合いをしやすくする）

机の配置を討議形式（シマ／アイランド型）にし、児童同士の距離を近付け、ホワイトボードを確認しながら意見を出しやすくする。

（例）４人グループの場合



・場づくりのスキル

みんなが安心して意見を出し合える場の雰囲気づくりをする。

今回の指導では、アイスブレイキング（授業前にグループごとに簡単な遊びをしておく。）を行うことで、緊張をほぐし、和やかな雰囲気で話合いができるようにすることをねらいとする。

〇特別支援学級としての配慮

①話合いの人数を２人から４人程度の少人数にし、意見を言いやすくする。

②グループ編成の際に、子ども間の人間関係や相性を考慮し、安心して話し合えるようにする。

③一人ひとりの意見を尊重しつつ、みんなが納得できる話合いになるように必要に応じて個別に言葉掛けをする。

④情報を精選し、児童が内容を理解して集中して活動できるようにする。

⑤児童の理解度や反応に応じて、オープン・クエスチョンとクローズド・クエスチョンを意識的に使い分ける。

〇ＩＣＴの活用

学習用端末を用いて調べたり発表したりすることで、児童が視覚的に分かりやすい動画などの資料を探したり、発表したりできるようにする。

〇振り返りの工夫

単元全体の自己評価を見やすいように、１枚のワークシートにまとめて振り返りができるようにする。短い時間でも自分で振り返りがしやすいように絵文字を選択することで自己評価できるようにワークシートを工夫する。自分の意見を詳しく書き込める児童のためには、記述欄を設ける。

２　調査研究

所属校において、話合いが成立するようにファシリテーションの技法を用いて授業の進め方や場の工夫、ファシリテータとして言葉掛けの工夫をし、授業の改善を行った。普段あまり話合いに参加できていない児童数名を抽出し、観察してその変容を分析した。

３　授業研究

（１）単元設定について

知的障害のある児童の学習上の特徴として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で活かすことが難しいことが挙げられる。そのため、実際の生活場面に即しながら、繰り返して学習することにより、必要な知識や技能を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導が重要となる。また、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが多い。そのため、学習の過程では、児童が頑張っているところやできたところを細かく認めたり、称賛したりすることで、児童の自信や主体的に取り組む意欲を育むことが重要となる。さらに、抽象的な内容の指導よりも、実際的な生活場面の中で、具体的に思考や判断、表現できるようにする指導が効果的である。（特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編）

本学級では生活単元学習として春と秋に野菜を育て、その野菜を使って調理をする活動を継続的に行っている。特に調理することに子どもたちはとても意欲的である。そこで、子どもたちが興味・関心のある調理会に向けた学習の中にファシリテーションの技法を用いた話し合い活動を取り入れることで、話合いを活発にし、主体的にお互いの考えを伝え合える機会を設定した。

（２）検証授業（令和６年１１月実施）

特別支援学級の生活単元学習「調理会をしよう」で検証授業を実施した。

（ア）実践の概要

（１）単元の目標

〇調理会に向けて調理の仕方や必要な材料・用具を調べ、自分の役割を理解して準備をすることができる。【知識及び技能】

〇自分の考えを相手に伝えたり、相手の意見を聞いたりし、自分の考えをまとめることができる。【思考力・判断力・表現力等】

〇調理会に向けて、準備や仕事を友達と協力して行ったり、低学年に伝えたりしようとしている。【学びに向かう力、人間性等】

（２）単元の評価基準

児童の実態に応じて、評価基準をＡ・Ｂの２段階に分けて設定した。

	ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
A	①自分の役割を理解し、役割に合った行動をすることができる。 ②調理に必要な材料の分量や手順が分かり、調理計画について理解することができる。	①自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら自分の考えをまとめ、調理会の内容を考えている。 ②自分のやりたい役割や活動を選択している。	①自分の役割に責任をもち、友達と協力して調理会の準備や仕事をしようとしている。 ②調理計画や役割分担について低学年に伝えようとしている。

B	①自分の役割を理解し、支援を受けながら役割に合った行動ができる。 ②調理に必要な材料や手順が分かり、調理計画について大まかにつかむことができる。	①自分の考えを伝えたり、友だちの意見を聞いたりし、調理会の内容を考えている。 ②自分のやりたい役割や活動を選択肢の中から選んでいる。	①友だちと協力して調理会の準備や仕事をしようとしている。 ②調理計画について低学年に伝えようとしている。

（３）単元の指導計画と評価計画（全８時間）

時	ねらい	◇学習内容・■学習活動	評価基準
第１時	○自分で調理をしたい野菜を選ぶことができる。	◇学級園で育てたどの秋野菜で料理を作りたいか考える。 ■理由を言って、調理したい野菜を選ぶ。	イ　②
第２時	○自分で料理方法を調べ、作りたい料理を選ぶことができる。	◇どのような料理があるのか調べ、作りたい料理を一つ選ぶ。 ■学習用端末を用いて、選んだ野菜に合った料理を調べる。調べた中から料理を選ぶポイントに合った料理を一つ選ぶ。	イ　②
第３時 （本時）	○自分の決めた料理について発表し、どの料理にするか話し合うことができる。	◇野菜ごとに集まってどの料理にしたいか話し合う。 ■料理を選ぶポイントに照らし合わせながら料理を比べ、自分の意見を言う。	イ　①
第４時	○料理の作り方や必要な材料、用具について調べ、まとめることができる。	◇料理の作り方や必要な材料、用具についてまとめる。 ■自分たちのグループで決めた料理について学習用端末を活用しながら料理の手順、材料、用具を調べ、ワークシートに分かりやすくまとめる。発表の練習をする。	ア　② ウ　①

第５時	○自分の作る料理について、友だちに伝えることができる。	◇友だちに発表する。 ■他のグループや低学年の友だちに、学習用端末とワークシートを用いながら料理について話す。	ア　① イ　① ウ　②
第６時	○自分の担当する材料を買うことができる。	◇買い物をする。 ■各グループで分担した料理の材料を買うため、スーパーに行く。自分が担当した材料を探し、選ぶ。レジで支払う。	ア　① イ　② ウ　①
第７時	○友だちと協力しながら調理をすることができる。	◇調理会をする。 ■友達と役割分担をしながら調理を行う。	ア　①② ウ　①②
第８時	○調理会で気付いたことをまとめ、友だちに伝えることができる。	◇まとめ・振り返りをする。 ■ワークシートに調理会で良かったこと、気になったことについて書き、友だちと発表し合う。	イ　①

（４）本時の目標

○自分の決めた料理について発表し、どの料理にするのか話し合うことができる。

（５）本時の展開

時間	○学習内容・学習活動	・指導上の留意点　配慮事項	評価基準・評価方法
導入 （５分）	○始業の挨拶をする。 ○学習の流れを確認する。 ○めあての確認をする。	・予め話しやすいように机や椅子を配置しておく。（シマ・アイランド型） ・１時間の流れを視覚的に示す。時間配分を予め示し、活動の切り替えをしやすくする。	
	調理会で作る料理を何にするのか話し合おう。		
	○話合いのグランドルールを確認する。		

展開１ （１０分）	○グループごとに自分の作りたい料理について発表する。	・学習用端末を用いて、料理の作り方が分かりやすく示せるようにする。	
展開２ （２５分）	○グループごとにどの料理にするのか話し合う。 ・意見がまとまらなかった際にどういう方法で合意形成をするのか決めておく。 ・安全で簡単に作れる料理であることを条件として、話し合いを進める。(手順や材料の数、時間、値段の比較) ・決まった料理を誰が発表するか決めておく。 ○グループで決まった料理を発表する。	・「安全で簡単に作れる料理」ということを意識させていく。 ・各グループに教師が入り、議論の内容をホワイトボードに書き込み、議論を可視化する。(ファシリテーション・グラフィック) ・意見をあまり言わない児童に対して、ホワイトボードを示しながら意思の確認をし、どの児童の考えも入るようにする。 ・決まらなかったグループがいても、後日時間をとって話合いができるようにする。	イ　① 自分の考えを伝えたり、友だちの意見を聞いたりし、調理会の内容を考えている。 （行動観察）
まとめ （５分）	○振り返りを行う。 ○次回の学習の予定を知る。 ○終業の挨拶をする。	・工夫したワークシートを用いて振り返りを行う。 ・見通しがもてるように次回の学習で行うことを伝える。	

（イ）考察

本学級が継続的に取り組んでいる調理会に向けての学習で話合い活動を行うことで、子どもたちは意欲的に活動に参加していた。また、特別支援の観点を踏まえたファシリテーションの手法を用いることで、以下の結果が得られた。

①グランドルールを２つに絞ることで、ルールを意識することができていた。
②１時間の流れを短い言葉と掲示で示したり、時間配分を設定したりすることは、見通しをもつことや場面の切り替えをすることに有効であった。
③話し合いのポイントを焦点化し、ファシリテーション・グラフィックを用いて話合いの内容をホワイトボードに記入し視覚化することは、意見を出しやすくすることにつながった。また、「よい」「よくない」を絵のマークにして示すことも、論点を比較する上で効果的であった。

④３人グループで話合いを行ったが、３つの意見を一度に比較して１つに絞るのは難しいため、２つずつ段階的に比較することで話合いを進めることができたが、かなり時間を要した。
⑤事前に自分の意見が通らなかったときの気持ちの折り合いを付ける手だてを考えておくことが、合意形成を図る上で有効であった。
⑥児童の処理速度の違いを考慮すると、25 分で合意形成をすることは難しかった。
⑦１単位時間の中で合意形成ができなくても、時間をおいてまた話し合うことで合意形成につながるケースが見られた。休憩を入れたり、次の日に行ったりすることも必要であった。
⑧ワークシートでの振り返りは、絵文字を選択することで自己評価できるものと、自分の意見を詳しく書き込めるものの２パターンにしたことで、児童の実態に合った振り返りを行うことができた。

第４　研究の成果

知的障害のある児童の場合、コミュニケーションが苦手で、人と関わることに消極的になったり、受け身的な態度になったりすることがある。本学級の児童も数名が該当する。このような場合に、自分の考えや要求が伝わったり、相手の意図を受けとめたりする双方向のコミュニケーションが成立する成功体験を積み重ね、自ら積極的に人と関わろうとする意欲を育てることが大切である。（特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編）

７月までに行った話合い活動では、自分の意見を一方的に話したり、話合いに消極的で自分の意見を言えなかったりする児童が目立った。しかし、２学期以降にファシリテーションの技法を用いた授業を行い、話合いの論点を明確にし、ファシリテータが細分化して話し合いを丁寧に進めることで、一方的で主観的な意見ではなく、比較をした上で根拠のある意見を言う児童が多く見られるようになった。また、抽象的な思考が苦手な児童に対して、クローズド・クエスチョンを重ねていくことで、意見の表出につながり、相手に自分の考えを伝えられる場面が見られた。

ワーキングメモリや処理速度・注意機能に困難さのある児童に対しては、刺激量を調整し、情報を精選することが必要であるが、児童が話合い活動の進め方を理解する上で、板書や話合いのポイントを絞って焦点化することはとても効果的だった。また、ファシリテーション・グラフィックで意見を視覚化することで、話合いの過程が分かり、処理速度の緩やかな児童や注意が低下した児童でも内容を確認しながら安心して話合いを進めていくことができた。

よって、知的特別支援学級でも、ファシリテーションの技法を用いて話合い活動における場の設定を工夫することで、児童が話合いに参加し、話合いを成立させることができた。

第５　今後の課題

特別支援学級で話合い活動をする場合、合意形成までに長く時間を要する可能性が高い。そのため、今後話合い活動をする際には、活動の時間を長めに設定したり、ときには一度話合いを中断して時間を空けたりできるように計画する必要がある。

話合い活動で自分の意見を表出するのが難しい児童については、２人で話し合うことから始め、慣れてきてから３人に増やしていく必要があることが分かった。より少人数で話合い活動を行うことが望ましいが、そのためには、グループの数に応じた人数のファシリテータを確保する必要があ

るため、全てを少人数にするのは難しい。児童一人ひとりの実態に応じてグループ内の人数を増減する工夫をしていく必要がある。

今回ファシリテーションの技法を活用した授業を行う上で、ファシリテータとなる教師間で事前に模擬授業を行い、綿密な共通理解を図った。どのグループでも同じようにファシリテートするためには、教師間で話合いの進め方や論点の絞り方、目的・ゴールの確認、合意形成の方法などを事前に確認する必要がある。また、教師がファシリテーション・グラフィックを効果的にまとめたり、ファシリテータとしての司会のスキルを身に付けたりするためには、今後も繰り返し実践を積み重ねていく必要がある。

生活単元学習以外に道徳や総合的な学習の時間、学級活動などの学習場面でも継続的に話合い活動に取り組み、経験を積み重ねることで、教師も児童も話合い活動における知識や技能等を身に付けられるようにしていく。

【補助資料１】調査研究

１　調査研究の目的

所属校において、話合いが成立するようにファシリテーションの技法を用いて授業の進め方や場の工夫、ファシリテータとして言葉掛けの工夫をし、授業の改善を行った。普段あまり話合いに参加できていない児童を抽出し、観察してその変容を分析することで、ファシリテーションの技法が効果的であるか検証した。

２　調査の時期

令和６年７月から令和６年１２月まで

３　調査の対象

所属校の児童１名

		児童 A（観察対象）
生活単元学習	指導目標	友達との話合いに参加し、自分の考えを伝えられるようにする。
	手立て	ホワイトボードを示しながら、話合いの視点を明確にする。言葉をいくつか挙げ、その中から選べるようにする。論点ごとに意思確認を行う。
自立活動	指導目標	自分の意図を伝えたり、相手の意図を理解したりすることができるようにする。
	手立て	絵カードを用いて意図を伝えたり、理解したりしやすくする。

４　設問と結果

ファシリテーションの技法が効果的であるかを検証するため、話合い活動での児童のようすを観察した。７月の調理会に向けた話合い活動では、ファシリテーション・グラフィックを用いずに行ったところ、対象児童は話合いに消極的で、具体的な意見を述べることは難しかった。また、９月の道徳の授業で情報量の多い内容について話合いを行う場面があると、意見を選択肢の中から選ぶことも難しかった。

11 月に取り組んだファシリテーション・グラフィックにより、論点を視覚化し、焦点化することで、自分の意見を主体的に述べることができた。また、論点を正しく理解し、話合いに参加することができた。数字や絵で示した二つの意見を比較することで、自分の考えを主張することもできた。合意形成に関しては、時間を要した。児童の意見が条件に合わなかったとしても、よい点を取り上げて、肯定的に受け止める必要があった。

【補助資料２】〈参考文献一覧〉

・本山雅英　はじめてのコーチングとファシリテーション　北大路書房　2022 年
・堀公俊・加藤彰　ファシリテーション・グラフィック　議論を「見える化」する技法　日本経済新聞出版　2006 年
・岡部孝幸・ちょんせいこ　学級経営がうまくいくファシリテーション　学事出版　2023 年
・授業づくりネットワーク　教室の中の多様性とファシリテーション　学事出版　2023 年
・米井隆・岩元宏輔・森格　テクニックに走らないファシリテーション産業能率大学出版部 2021 年

・橋本創一　知的障害・発達障害児における実行機能に関する脳科学的研究　福村出版　2020 年
・工藤　亘　「令和の日本型学校教育に求められる教師のファシリテーション能力についての一考察－学校教育でのファシリテーション・サイクルを目指してー」玉川大学教師教育リサーチセンター年俸（11），97－108，2021－12－15
・斎藤雄次「学校教育におけるファシリテーションの可能性ー協同学習を含む既存の学びと熟議の関係に着目してー」名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究（35），105－136，2021－01
・荒井英治郎「「ファシリテーション」を問い直す」教職研究（12）104ー112，2021－03－31 信州大学教職支援センター